

たった一人で、北陸、東北から八ヶ月をかけて江戸に辿り着いたミチは、たぎる熱情に任せて三年もの間を江戸で過ごした。

江戸はあらゆる種類の人間が、巢穴の中の蟻達のようにせわしなくせかせかと、しかも生き生きと暮らす町だった。すべての知性と狂気が混然と混ざり合い、停滞することなく明滅する町でもあった。

ミチの周囲のどれもこれもが、長府や田耕で目にしてたものとはまるで違っていた。何もかもが大きい。雄藩の江戸屋敷などは、いずれも長府藩邸をしのぐ大きさだった。

町屋も武家屋敷の並びも人の多さも、江戸の町に足を踏み入れた途端、次元の異なる世界に迷い込んだかと思われた。だけど、江戸の町は不思議にミチの肌に馴染んだ。去り難い思いを抱いたまま故郷に向かい日本橋を渡る時、何度も何度も後ろを振り返る自分をいまいましく感じたものだった。それだけではなかった。江戸での三年の暮らしは、ミチの成長をも確かなものにした。

圧倒的な個性のぶつかり合いに揉まれる中で、俳人として生きて行く自信が確実に備わってきたのだ。

その証は、菊車の号を変えたいという気持ちになって現れ

た。きくしやという言葉の響きは気に入っていたが、車、の文字が今の自分には若すぎるように思える。

ミチは、江戸を離れるのを一つの区切りに、菊車よりも奥行を感じる、菊舎、に号を変えることを決心した。

俳号を改めてみると、たったそれだけの事なのに、新しい着物を仕立てた時にも似た喜びが湧き上がって来た。

日本橋を渡るミチの胸の中は、芝居の二幕目が開く前の、次の展開を期待する高揚と、去り難い江戸への未練とがせめぎあっていた。

長府に戻って八年の月日が流れた或る朝のことだった。起きるに物憂い床の中で、半睡のまなこを開けて薄っすらと明るくなった障子を眺めていると、全く突然に突き上げてくる抑えようのない旅への衝動ではつきりと目が覚めた。

十一年前、亡夫利之助と一緒に旅をするつもりで美濃から江戸を目指した。初めての長旅だったこともあって予想をしない失敗の繰り返しだったように思う。

大坂の港で、船賃を払ったばかりの巾着を盗まれ途方にくれた。熊と遭遇する恐怖と闘いながら、暗闇の山中を一晚中さ迷い歩いた。

その時は泣き出したいくらいの衝撃だったり、死ぬほどの恐怖だったはずなのに、八年という年月がそれらの総てを薫

り高い銘酒に仕立て上げて、ミチはその美酒に陶然と酔いしれていた。

その酔いが最も深まった時、ミチの目にはもう他の物は何も映らなかつた。遠く信州の山並みや、三年の歳月を暮した江戸のたたずまいだけが見えていた。

それと、忘れられない記憶がひとつ。

三田尻から出る舟便は明後日だと聞いた。ミチは三里に灸をするのもどかしく旅の仕度に取り掛かつた。

三田尻の港は、沖から吹き付ける強い風で白波が唸りを上げて立ち上がり、激しい音をたてて海岸に砕けていた。

乗組員と思われる男二人が、舟の陰にムシロを敷き、胡坐をかいて花札を繰っていた。傍には空になつた酒徳利が転がつたままである。

「今日は船は出ねえ。明日の朝だな。乗るんなら明け七つ半に来てくんな。」

近づいたミチに一方の男が顔をあげてそう言った。大方予想をしていたミチは、やつぱりね、と引き返そうとしたところに、六尺近い大男が近づいて

「おや菊舎さん、同じ船とは嬉しいですね」と声をかけた。

男は同じ長府で薬種屋を営む利衛門だつた。上方まで薬の仕入れに行くと言つた。ミチはこの薬種屋が苦手だつた。悪い人ではないと思うのだが、日頃の余りにも粗雑な振る舞い

がミチを苛立たせた。

ミチは旅心に急かされて、早い船便を選んだことを少し悔やんだ。十日後の便にすれば、俳友達ともゆっくり旅立ちの挨拶が出来たし、家族と濃い時間を持つこともできた。

そして何より、薬種屋利衛門と道連れにならずにすんだのに、とせつちちな自分を恨んだ。

男はそんなミチの気分など全く気にしていなかつた。まるで自分の家族にでも喋るようにぞんざいな口をきいた。

翌朝、明け七つ半前に船着き場に行くと、利衛門は既に歩み板の傍でミチを待っていた。

周囲はまだ夜の色が濃く、目指す船は黒い影の塊にしかなえない。

船の傍に立っている利衛門の姿は暗闇に紛れて遠目には見えなかつたが、時折小さな火明かりが明滅するのは、利衛門が煙管を吹かしているからだつた。

ミチはこれから大坂に着くまでの何日かを、利衛門と過ごすのかと思うと気が重かつた。大口を開け、ヤニ臭い息を牛のように吐き出す大男はどうにも勝手が悪い。

船着き場に来る途中でふと思いついたことがあつた。岩国から先、歩いたことの無い西国街道を進むのも悪くないな、と考へた。安芸や備前の地にはいまだに足を踏み入れたことがなかつたのだ。

ミチは利衛門に近づいて、まだ見たことは無いが、河馬の

ように突き出た腹を確認した途端に心が決まった。

「おはようございます。この頃は時候も良いことですし、いい機会なので私は西国街道を上方まで行くことにしましたので挨拶に参りました。どうぞ良い船旅をお祈りいたします」

そう言っただけでミチが頭を下げる姿を星明りの中でぼんやり眺めていた利衛門は、すぐには事態が飲み込めなかったようだった。

少しの間があいて、利衛門は引き返しかけたミチの二の腕を、木魚の座布団のように肉が盛り上がった手でむんずと掴むと

「それはいけません。女が一人で街道を歩くより、船のほうが断然安全だし早い。船賃のことなら心配しなさんな。私に任せなさい」

言い終わらないうちに、利衛門は空いている片方の手でミチの荷物をひったくると、さつさと先に立って歩み板を渡り始めた。

荷物を取られてしまったミチは、利衛門に続いて船に乗るより他にたてはなかった。

前日まで吹いた強い風はピタリと止んでいた。港を離れた船が沖に出ても海は鏡のように穏やかだった。

東流れの潮に乗った船は、揺れもせず左右の小島を縫うように快適に進んだ。だが潮目が変わった途端、船は全く進ま

なくなった。潮流に逆らって船を進めるほどの風は吹いていなかった。

進んでいるのかいないのか分からない船内で、利衛門から商いの話しや若い頃の遊興の自慢話を聞かされ続け、ミチはうんざりしていた。

利衛門の声は割れ鐘に似た悪声である。その上周囲にはばかりの大声である。

吐く息はいつもヤニ臭い。そればかりか、胃の腑を患っているのではないかと思われる腐敗臭が混じっている。

ミチの愛想笑いが引きつっていた。

ノロノロとした船足に見切りをつけた船頭は、下津井の港で風待ちをする決心をした。

僅かな風を頼りに船を棧橋に繋ぐと、退屈していた船客はぞろぞろ船を降りていった。

利衛門は、港近くの料理屋に馴染みがあるので、そこで旨い物でも食べようとミチを誘った。

その前に小用を足してくる、と言って利衛門が船室から出ていった。

その時ミチは、まるでこの瞬間を待っていたかのように手早く荷物をまとめると、後も振り向かず船を降りてしまった。

船員には備前の旧知を尋ねることにした、といい加減なことを言った。

小用から戻った利衛門がさぞかし慌てるだろうと思った

が、気にしないことにした。

追って来るかとも思ったが、どうやらその気配は無さそう  
だった。